



經濟的豫見論について : 勝田貞次氏に應心

福田, 敬太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 36(3):375-392

(Issue Date)

1924-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053634>



經濟的豫見論について

— 勝田貞次氏に應ふ —

福 田 敬 太 郎

一

私はさきに經濟的豫見とその限界に就て一つの考察を試みたが(本誌第三十五卷第五號所載論文)その後二三の方々から有益なる批評を受けて大いに啓發せられるところがあつた。その一つは野村銀行調査部長勝田貞次氏の論文「財界先見の認識論的基礎」(銀行研究第六卷第一號所載參照)である。私はここに勝田氏の論文によつて提醒せられた若干の關係問題を取扱ひ、私の所説を一層明白にしたいと思ふ。

二

勝田氏は、恐らくは私がさきに「景氣の客觀的要素としての經濟狀態は初めから

營利行爲者の立場を離れないから國民經濟的意義に對立して私經濟的意義を持つてゐると云ひ得る。ゆゑに景氣研究は一個の私經濟學的任務である、と云つた言葉に基き、かつ私が經濟的豫見の限界を指示して投機に言及したことを非難して、「福田教授が財界先見の可能範圍を過小に考ふるに至れるは即ち財界先見を國民經濟的見地よりして取扱はざりしに依るが如く思はるる、」と云はれた。そして氏は自ら進んで財界先見の國民經濟的見地からの取扱を述べて教示せられるところがあつた。そこで今、氏の國民經濟的財界先見説を窺ふに先つて、私が景氣研究をもつて私經濟學的任務であると云つた理由を説明して置く。

そもそも私がさきの論文において企てたことは、實際行はれつつあるところの景氣研究に理論的根據を與ふことは從來の財界循環説をもつてしては不充分もしくは不適當であると考へたので、それを離れて一の景氣理論を樹立することであつた。すなはち從來の財界循環の理論は國民經濟的見地からのみ解説せられ、眞に景氣の私經濟的意義を説明することなしと愚考し、かつ景氣概念の本質上それは營利經濟の範圍においてのみ存するものなりと判斷し、また景氣研究は常に私經濟的立場からのみ行はれる實際の事情に顧みて私の企ての必ずしも無謀

ならざることを自信した。そして實際に行はれつつあるところの景氣研究の理論的根據を發見することが私の最も大なる關心事であつたことは云ふまでもない。勝田氏は、營利の見地からは財界先見を否定せざるを得ざるに至るのである。營利の見地から見れば具體的の財界先見は迷信にして抽象的の財界先見例へば何時か必ず物價は下落すべしと云ふの類は無用の長物たらざるを得ざるは當然である」と云つてをられる。しかるに私は多數の營利行爲者が實際的目的のために行つてゐる經濟的豫見をもつて、その當否は別として、直ちに迷信なりとは斷じ得ないのである。彼等の豫見が全然根據なき空想であるとは云へない。事實について見ても彼等が何らかの材料を基礎としてそこに彼等の信じて妥當なりとする判斷を加へてゐる。これをもつて直ちに迷信なりと斷定することは、さきに私が述べたやうに、批判的精神を缺いた獨斷論である。もとより多數の營利行爲者の經濟的豫見はその方法において粗漏であり、その結果において誤謬に陥ることとはあらう。しかしその失敗が彼等の豫見に全然理論的根據なきことを示すものとは云へない。そこで私の試みたことはその營利行爲者が實際行ひつつあるところの經濟的豫見ははたして如何なる理論的根據に基くものであるかを批判

することであつた。従つて私の研究の對象は當初から私經濟學的範圍を出でない。そして勝田氏の所謂國民經濟的見地からの財界先見と云ふことは私に取つては全く別個の問題であつたのである。

從來の財界循環説その論理的構造の基礎は勝田氏が解明せんと試みられたところであるが、私はそれに對して後述する如く異論を持つてゐるは所詮一個の自然科學的解説に過ぎない。私はそれに慊らず思つて新しく純歴史科學的方法論によつて、嚴重に云へばその方法論的適用によつて、景氣理論を樹立しやうと企てたのである。そしてかくすることの結果はやがて愚考するところの景氣理論と同一の論理的根據が國民經濟的範圍にも適用せられ、ここに一般に經濟的豫見が可能となり、しかもその場合においてもなほ經濟的豫見に限度あるべしと思ふのである。ゆゑにさきに私が私經濟的見地からのみ考察したことには、景氣理論そのものが私經濟學的研究範圍たることを暗示してゐることもに、經濟的豫見一般の論理が同様に從來の財界循環説を離れて發見せらるべきものであることを豫想してゐるのである。従つてその點において私は、財界先見を私經濟的のみに取扱ふが故にそれが迷信乃至非科學的となつたとせられる勝田氏と全然對立してゐる

る。私は私經濟的取扱を貫徹するところにその論理的根據が明かにせられ、經濟的豫見の可能範圍が擴大せられ、やがて國民經濟的範圍の事象についても作用し得るのであると信ずるものである。そこで私は反覆する、景氣研究は私經濟學的任務であり、經濟的豫見の論理をまづ私經濟的範圍において求むべきであると。

三

しからば私は何故に從來の財界循環説から獨立して景氣理論を樹立しやうと思つたか。それはさきに私が述べたところによつても明かであると信ずるが、なほ勝田氏が試みられた財界循環説の論理的解剖を顧みたとで私の思想を闡明して見やう。

勝田氏は財界循環をもつて財界合理性の顯現であるとせられた。そして財界そのものに一の合理性が存在し、その合理性を基礎として財界の理論的合理化を試みることが財界先見であり、理論的合理化を基礎として意思的合理化を行ふことが財界統制(Business Control)である、と云ふのが氏の根本思想であると察せられる。しかしながら財界に存する合理性とは何であるか。氏の説明は不幸にして私を

して充分首肯せしめることができないが、所謂財界合理性とは一の經濟的理想を意味することは氏の言葉によつて明かである。すなはち氏によれば財界合理性は、確實なる將來の捕捉を可能ならしむる經濟的理想である。しかしらばかかる財界合理性は如何にして認識せられるか。それに對して氏は「一定の理念に依つて現實態を構成し規定し、變轉極りなき現實態のうちにも靜止せる理念の嚴然たる韻律ありと考へるところに成立する」と應へられる。ここに用語の末に走る煩鎖なる論議を棄てて、氏の思想の大綱を握つて考へて見ると、財界合理性の認識は結局氏によれば一の法則的認識である。もとより氏の所謂財界構造は所謂相互法則的複合體であつて極めて複雑なる關係を有するものであるが、原理上それが法則的認識の對象として思考せられてゐることは争へない。氏がかく主張せられることは、思ふに、バブソンの行へるが如く各種の材料、すなはち或ひは物價統計、或ひは通貨統計等の系線間の機械的關係から一の合成的系線を作出する方法に一の論理的根據を與ふるものであらうけれども、財界にかくの如き法則的合理性ありと斷言することは經濟的豫見とはたして如何なる關係があるであらうか。勝田氏は財界先見をこの經濟的理想たる財界合理性に基く合理化の過程であると

せられた。すなはち氏に従へば財界構造が一の必然的法則的關係として存在するがゆゑに現實態は當然その財界構造の必然的法則性に一致せる結果を示さざるべからず、ゆゑに現實態の變化はかくあらんと豫見し、またかくあるべしと指導することができるのである。ここに氏の場合に著しく誇張せられてゐる經濟政策的主張のあることは輕視すべきではないが、そのことについては後述したい。

翻つて私は勝田氏の所謂財界構造の如き必然的法則的複合體を構成することを經濟的豫見の當面の任務とすることを避ける。必然的法則的複合體たる財界構造は、氏の云はれる如く、時の流れを超越せるものであつて、時所と無關係なる自然科學的法則的認識の對象である。しかるに私は將來豫見の原理を自然科學的法則的認識の論理に求めずして、むしろ反對に時の流れの上に浮搖する個別的現實態を漁り行くところの歴史科學的目的論的認識の論理にこれを求める。さればこそ私は從來の財界循環説と手を斷たねばならないのである。これは私のさきの論文にも云つた如く、また勝田氏の財界循環説の論理的解剖に對する私の批評によつても知られる如く、財界循環説は本來一の自然科學的法則的認識方法によつてのみ求め得るところの理論であるからである。ゆゑに私は財界循環説を

離れて一の經濟的豫見論を樹立することを試みるに至つたのである。

四

將來豫見の方法は歴史科學的個別化的目的論的認識の論理に基くべきものである。云ふまでもなく我々が何らの統制原理を有せず漠然として將來に對するならば將來は混沌たる Chaos に過ぎない。將來に對するとき我等は必ず一の目的を有し、何らかの希望を懷く。目的もしくは希望なくして將來は無意味である。「勉強しないと立身がでさなう」と云ふことよりも「立身するため勉強する」と云ふことが將來豫見に關聯して引用せらるべき卑近なる一例ではあるまいか。それゆゑに例へば計算によつて確認し得るところの千九百三十三年七月十六日午前九時五十三分十二秒から始まるべき日蝕現象がありとしても、それが何らかの目的もしくは希望に關係せしめられない限りは一の自然的必然的事象として存在するのみであつて、少しも將來的事實としての意義を持たないものである。しかるにかくの如き目的論的考察は屢實際的功利主義的傾向を伴ふものであることは投機に關聯して私がさきの論文において指摘したところである。しかしな

がら目的論そのものが實際主義的性質を持つてゐる譯ではない。實際主義的効果はただ生活事實に關係するところの投機判斷を通してのみ現はれるのである。將來の目的論的考察は、後述する如く論理的統制原理として無内容なる正常概念を確立し、それを手段とするることによつて、實際主義的立場を離れて成立し得るのである。

この點において私は勝田氏の營利經濟對厚生經濟の論旨をもつて的を失つたものであると考へる。私の觀るところでは營利も厚生も同様に實際主義的立場を離れてゐるものではない。一をもつて他の手段と解し、もしくは兩者を經濟生活における兩極端の如く解することは經濟政策的立場においてのみ通用する議論であつて、經濟的豫見の論理を發見しやうとする我々の立場においては無意味である。勝田氏が財界先見を國民經濟的立場において行ふべしと主張せられることは換言すれば經濟政策の理論的根據を求むるために財界先見をなすべしと云ふことである。財界構造はかくの如きものなるべし、ゆゑにかくの如きものとせざるべからず、と云ふ段取りを與へやうとせられる。それは誠に一理あることながら、不幸にして私の企圖するところの經濟的豫見の論理を發見せんとするこ

ことは全然別個の事柄である。繰返して云ふやうであるが私は營利行爲者が現に行ひつつあるところの景氣研究すなはち經濟的豫見の理論的根據を見出さんとするものである。

しかるに翻つて考へると營利も厚生も共に實際主義的立場を離れないものであるから原理上、一方について將來豫見の論理を發見することが他方について全然不可能であつたり、一方において試みることもが他方において試みることも狭かつたりすることはあり得ない。換言すれば營利行爲者において將來豫見の事實が存在し、同様に國民經濟的意識において活動せる爲政者が將來豫見を行ふならば前者についてその論理的根據が明知せられるならば後者についても同一の原理が適用せられ得る。すなはち私の結論をもつてすれば經濟的豫見の統制原理としての正常概念は私經濟的範圍に止まらず國民經濟的範圍においても通用すべく、従つてそれは營利と云ふ私經濟的目的に關聯して構成せられることもあるべく、または厚生と云ふ國民經濟的目的に關係して構成せられることもあるのである。ただ私の研究の端緒は私經濟的範圍における景氣理論に存してゐたのである。

顧るに勝田氏も示された如く財界先見と云ふことが國民經濟的意義において考へられるやうになつたことは企業政策、詳言すれば企業に對する國民經濟政策と云ふ新しい問題が起るに至つた最近のことである。そしてその如く國民經濟的財界先見の必要に伴つて従來の恐慌論が財界循環論に進歩したのである。このことは學說史の明示するところである(Mitchell, Business Cycles, p. 311. 參照)。しかるに經濟的豫見そのことは國民經濟的範圍に先つて私經濟的範圍において夙くから實行せられてゐた。この古くから實行せられつつあるところの私經濟的なる經濟的豫見の論理を求めるに當つて、それを沒批判的に財界循環論によることは正しくない。まして國民經濟的意義における經濟的豫見すらも財界循環論にその論理的根據を發見せんとすること、私の信ずるところによれば、誤れるにおいておや。

五

實際主義的立場にある營利または厚生を離れて將來豫見の目的論的形式論理は如何。たとひ實際主義的立場を離れても將來豫見は目的論的、個別化的認識の論理を脱してはならない。將來豫見は必ず一定の目的または一定の價値に關係

せしめることによつてのみ可能である。私はそれを形式的には正常概念に求めるのである。もとより將來起るであらうところのものは我々に取つては一の認識論的偶然である。しかしながら將來に存在するそして現在それを構成するところの正常は決して認識論的偶然ではない。雑多なる現實態から材料を獲得し、一定の價値に關係せしめてそれを統一して過去を認識する如く、同様に我々が將來を認識し得ることは論理上の要求である。過去に對して理想典型を構成する如く將來に對して理想正常を構成せねばならない。

この點において勝田氏が私の正常概念を正しく理解して居られないことを云はねばならない。そして私に批評を與へられた二三の人々は皆多様に解釋して居られることを見ると私の正常概念がかなり難解でありまた私の表現方法が拙劣であつたことを思はざるを得ない。私が正常概念を捕捉したのは、さきの論文にも述べたやうに、マーシャル等の所謂 normal の概念から出發してそれを極度に展開したことによるが、しかし正常概念は norm 概念の如く靜態的觀察によつて捕捉せられるものではない。この點において正常概念は norm 概念と原理上相反するものである。また正常概念は決して勝田氏の考へられるやうに氏の所謂財界

構造に匹敵するものでなく、それよりも純粹なる理想概念である。正常概念は自然科學的產物ではなく、反對に歴史科學的構成であり、時に關係せしめるために動化するの必要なく、その本質上可變的なものである。この勝田氏の誤解に關する事柄は私のさきの論文によつてもさまざまに理解に困難なる點ではあるまいと思ふ。そこで私は既に縷述したことを繰返す代りに勝田氏の所謂財界構造が正常概念に匹敵するものではなく、むしろ正常概念の具體的適用の一例に過ぎないことを説明して、正常概念の性質を幾分でも解明したい。

正常概念は形式的理想概念であつて、絶對的普遍性を持つてゐる。ゆゑに我々の論旨によつて制限すれば、個別的(もしくは特殊的)正常たる經濟的「正常」を取扱ふことが當面の問題となる。そこでこの經濟的「正常」と財界構造との關係を明かにすればよい。勝田氏によれば、財界構造とは「經濟的相互律の複合體であつて、財界が財界として成立し得る基本である。財界構造は財界を超越せる統制原理である」。私は氏がこの支配的原理たる超越的概念に想到せられたことを感服するものであるが、ただ一つ疑問として残るのは、氏が「財界構造を、時の流れを超越せる分子」と考へられた點に存する。私の所謂經濟的「正常」は時の流れに即して存在するもの

であり、既に用ひた言葉を繰返せば、明日には明日の正常があり、明年には明年の正常があるのである。經濟的正常の可變性を説くところの私は財界構造の超時間性を唱へられるところの勝田氏と氷炭相容れない。私が經濟的正常の個別化的構成を主張するに對して勝田氏は財界構造の普遍的構成を高調せられる。そして私は普遍的に構成せられたる財界構造が如何にして時と關係ある現象を、氏の求められる如く、律することができるかと問はねばならぬ。もし財界構造概念をもつて一定時における經濟的正常を示すものであると解するならば、それは所詮經濟的正常の一應用である。しかもそれは極めて廣汎なる正常構成であつて事實上材料不足のため大いなる困難を生ずるばかりでなく、實際主義的立場における活動に充分なる利用を齎し得ず、殊に營利行爲者の目的には殆ど全く適はざるものではないかと思ふ。しかしながらも、實際上の利用如何は便宜問題に過ぎないとするならば、財界構造は理論上極めて制限せられたる具體概念であつて、財界構造の構成は決して經濟的豫見に論理的根據を與へることにはならない。から、財界構造概念そのものの存在の理由が疑はれることになる。

六

經濟的將來は無意味または超意味の世界ではない。經濟的將來は Welt des Jenseits ではない。しかし何らの統制原理を持たずしてこれに向ふならば結局一の混沌であつて經濟的として制約する根據すらあり得ない。經濟的將來を豫見することは經濟的正常を構成することによつて初めて可能となる。私は經濟的正常の一般化的構成と個別化的構成とを分けて考察して見る。凡そ個別的正常の一般化的構成は、歴史における普遍史記述に相當するところの普遍的、正常の構成の一階段である。普遍史に現はれるところのものは文化的生活の普遍的構造のみであつて、メーリスはその内容を分けて宗教的發展、美的發展、哲學的發展、道德的國家的發展としてゐるが (Georg Welling, *Lehrbuch der Geschichte's*)、同様に普遍的正常において地位を得るところのものは文化現象の普遍的構造のみであつて、その内容を宗教藝術、哲學、道德、政治、經濟等の範域に分けることができる。すなはち經濟的正常はこの場合普遍的正常の一部として構成せられる。私の觀るところによれば勝田氏の所謂財界構造はこの種の經濟的正常構成に當るものである。しかるに

普遍史において文化現象の普遍的構造の一を孤立して記述することは普遍史的事象の組織的關係を理解せしめることなくたゞひそれが支配的地位に立つところの文化現象であるとしても普遍史記述は完全ではない。同様に普遍的正常の構成においてその一部分たる經濟的正常のみを一般化的に構成することは殆ど無意味である。

ここにおいて經濟的正常構成を普遍的正常構成から離れて個別的正常構成として取扱はねばならぬ。この場合に經濟的正常の一般化的構成ではなく個別化的構成が問題となるのである。私の當面の研究問題は實にかくの如き經濟的正常の個別化的構成である。實際の經濟的豫見において問題となるのは、例へば一箇月後の大阪における攝州中米の相場如何來年一箇年間の我國における棉花消費量如何と云ふ如き類であるが、もとより我々は此等の個別的なる將來的事實を確認することはできない。しかしながら將來豫見において我々は例へば一箇月後の大阪における攝州中米の相場の正常状態を構成する。そしてかかる個別化的構成による正常は將來認識の手段であると共に將來豫見の目標となる。この仕事は恰も歴史に於ける特殊個別史の記述に相當するものである。これは私が

さきの論文でやや詳しく述べたことであり、また経済的正常的個別化的構成方法を説くことはこの一篇の目的とするところではないから今ここにこれ以上に深く立ち入らないことにする。

七

最後に述べて置きたいことは前段の末尾に近づいて軽く觸れたことであるが、將來認識と將來豫見との區別についてである。將來豫見は非合理性の克服であるけれども、合理性の確認ではなく、むしろ非合理性そのままの捕捉を目的としてゐる。換言すれば將來豫見の論理を探求することは將來認識の論理を樹立することであるべきやも圖られないけれども、將來豫見の論理をもつて直ちに將來認識の論理となすことはできない。前にも云つたやうに個別的正常構成は將來豫見の目標であり、將來認識の手段ではあるが、それをもつて決して將來認識の對象とはならぬ。私は將來認識の論理もしくは未來史の論理は存在せず、と云ふ獨斷論を排斥すると同時に、將來豫見の論理はすなはち將來認識の論理なり、とも妄斷することを否む。かく將來豫見は非合理性そのものの捕捉を目的としてゐるから

將來豫見の科學的任務のみをもつて終始すること能はず、最後に投機判斷によらざるを得ないことになるのである。經濟的豫見の限界とは經濟的豫見の科學的過程の限界を意味する。この意味において私は勝田氏の論文において一の早急なる議論を見出すのである。すなはち、將來は現實態を指導構成する所以の理念(?)であり、其れゆゑに將來は確實性以上の確實性(?)となり、此處に財界先見の認識論的基礎がある、とせられたことである。私はこの指導構成理念を規範的意味に解すべきや、或ひは必然的法則的意味に解すべきやを知らないけれども、いづれにしてもそれらによつて急速に將來認識の論理を求めるところは私の採る道ではない。私は實際に行はれつつある、ところの將來豫見の事實を根據付けることによつて、もしできるならば、將來認識の論理にまで達したのである。これが私の歴史的認識の論理に心惹かれる所以であり、正常構成と典型構成との同似性を重要視する理由である。——神戶一九二四二九一

〔附言〕 近く改訂出版せられると聞く勝田氏の「財界學」の巻頭にこの財界先見の認識論的基礎が論ぜられると云はれてゐ

る。私はこの新しき研究分野に尊き道しるべが與へられることを望みつつ、その現はれることを鶴首して待つ。